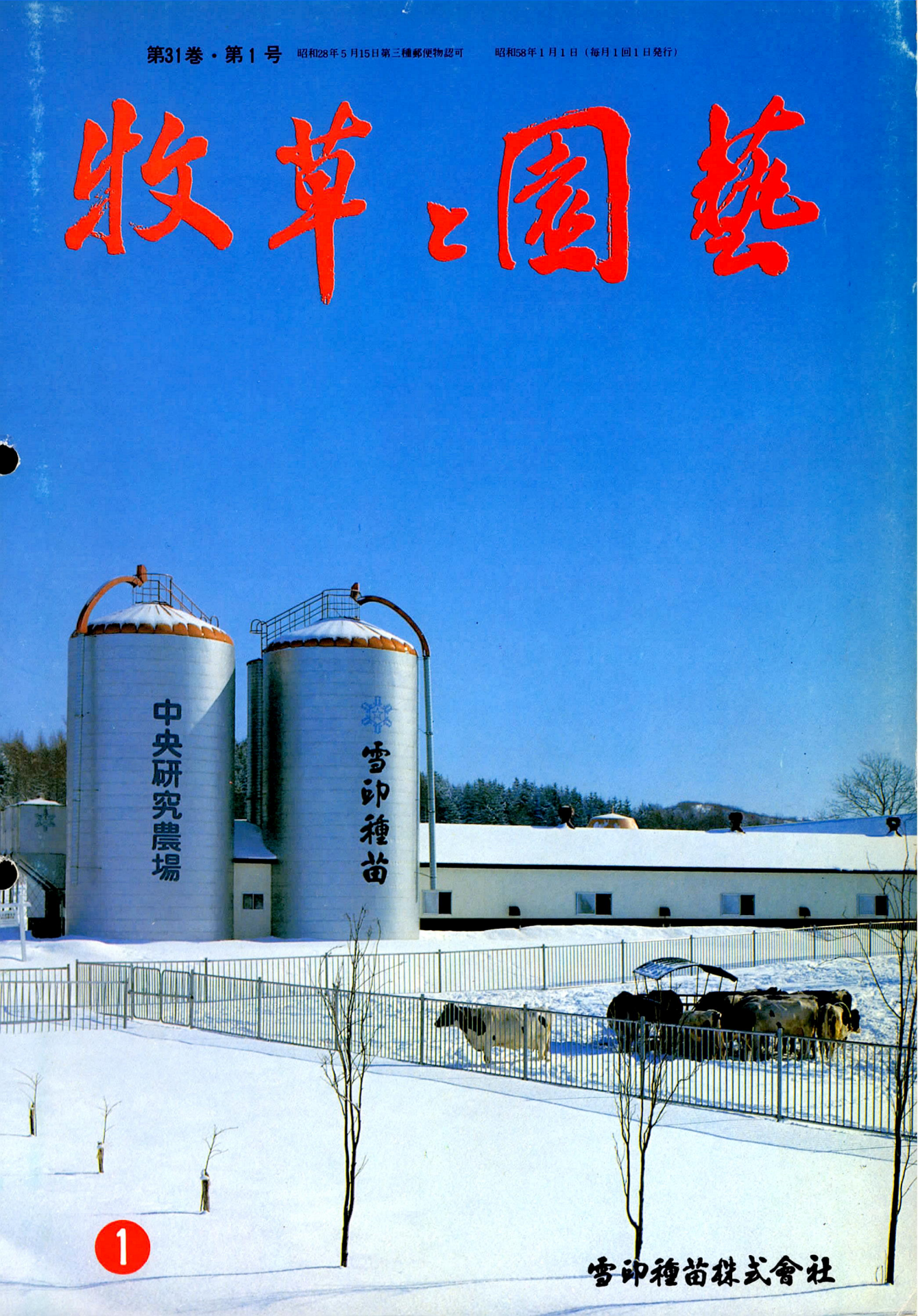
第31巻・第1号　昭和28年5月15日第三種郵便物認可　昭和58年1月1日（毎月1回1日発行）

牧草と園藝



1

雪印種苗株式會社

1983年の課題

―技術の活用―

このきびしい酪農環境下でも，悠々安定経営に成功している人々は少なくない。これらの人々は，牛乳・乳製品の将来に自信を持ち，酪農経営に誇りを抱き，乳牛に深い愛情を注ぎ，土地を肥やし，草をつくり，日進月歩する新技術をいち早く理解して着実に自己経営の中で活用し，1頭年間乳量を7～8トンにまで高め，しかも過剰な投資を慎み，牛乳の生産コストの低減や品質の向上に工夫をこらしており，60円乳価の可能性をもほのめかしている。それは酪農の原点をわきまえ，技術を忠実に生産性向上に結びつけている人々である。

今，牛乳の生産性向上やいわゆる国際競争力をもつために，最も速効的なポイントは，乳牛の健康を維持しその遺伝的能力を発揮させる飼料の適正給与である。草食・反芻動物である乳牛に対して，良質な粗飼料の充分な給与と乳牛にとっては異常なまでに大量の泌乳を強いることから生ずる栄養のアンバランスを濃厚飼料でいかにして補うかが，飼料適正給与の決め手である。それは古くから伝承されている土づくり・草づくり・牛づくりからはじまるが，そこに新しい技術をどのように取り入れるかが問題である。

酪農経営も，好むと好まざるとを問わず，国際的な激しい競争場裡に置かれている。競争力を持たなければ敗北である。すべての人々が1歩でも先んじようとしている時，草食・反芻動物である乳牛の自然原則を忠実に守ると共に，新しい技術を積極的に導入し，消化する工夫と努力なしには，真の生産性向上や競争力は生まれてこない。

そこへ到達するには長い道のりを必要とすることもある。しかし，飼料に関することは，今直ちにしかも自らの手で改善でき，そして目に見えた効果を期待できる。そして，それは今年の課題である。

謹んで新春を寿ぎ，「牧草と園芸」の読者各位の平素のご愛顧に感謝し，併せて今年もご健勝でますますご発展されることを衷心よりお祈り申し上げます。

本年も引続き厳しい農業環境が予想されますが，経営強化に必要な新しい技術情報を，本誌を通じてお届けいたします。相変らぬご叱声とお引立てをお願いし年頭のご挨拶といたします。

昭和58年　元旦

雪印種苗株式会社

取締役社長　中野富雄